

## LGBTQ+当事者学生・非当事者学生による社会正義のための協働型教育実践 —学生サークルにおける参加型アクションリサーチ—

澤田彬良 萩原悠斗 相浦芳葉 正木僚  
ミネソタ大学大学院 福井県立道守高校 筑波大学人文・文化学群 筑波大学大学院  
木原里沙 藤島充澄 後藤美句  
筑波大学人文・文化学群 筑波大学大学院 開智望小学校

**概要：**近年、日本の大学では LGBTQ+学生に対する支援や教育が徐々に拡大している。大学内の LGBTQ+関連サークルは支援や教育の場として特に重要な機能を果たしていると推察されるが、これらに焦点を当てた研究はほとんど蓄積がない。そこで本研究は、LGBTQ+関連サークルにて活動する当事者学生および非当事者学生が、①活動を通して何を学びどのように変化してきたのか、②いかにして活動への参与を継続できた／できなかったのかについて参加型アクションリサーチを援用して探究した。ここから明らかになったのは、①LGBTQ+当事者の具体的な生に触れたことで、共感的理解・態度の獲得や自己省察の深化が促され、差別是正に向けた変革的行動への積極性が増していったことと、②情動に基づいた問題意識の深化や差異尊重風土の構築、当事者／非当事者という二項対立的枠組みの脱構築、連帯のためのオルタナティブな基盤の構築などによって、メンバーらが活動に継続的に参与することができたということである。

**キーワード：**LGBTQ+、学生サークル、参加型アクションリサーチ、当事者、連帯

### *Social-Justice-Oriented Collaborative Learning of LGBTQ+ Students and Their Allies: Participatory Action Research in A Student Organization*

Akira Sawata Yuto Hagiwara Yoshiha Aiura Ryo Masaki  
University of Minnesota Michimori High School University of Tsukuba University of Tsukuba  
Risa Kihara Asu Fujishima Miku Goto  
University of Tsukuba University of Tsukuba Kaichi Nozomi Primary School

**Abstract:** In recent years, support and education for LGBTQ+ students have gradually expanded at Japanese universities. Although LGBTQ+-related student organizations are presumed to serve as a particularly important site of support and education, there have been few studies focusing on the educational and psychological functions of these communities in the Japanese context. Therefore, this study explored (1) what LGBTQ+ students and non-LGBTQ+ students learned and how they have changed through the engagement in the organization, and (2) how they were able/unable to continue their participation in these activities, using participatory action research. This research revealed that (1) encountering (other) LGBTQ+ people promoted empathetic understanding and deepened self-reflection, preparing members for the transformative action, and (2) the members were able to participate in the activities by being impacted by their affect, deconstructing the dichotomous framework of LGBTQ+ (tojisha)/non-LGBTQ+ (hi-tojisha), and creating an alternative group identity as the foundation for solidarity.

**Keywords:** LGBTQ+; Student Organization; Participatory Action Research; “Tojisha”, Solidarity

## 1. はじめに

日本では、1970年代以降のLGBTQ+当事者らによる社会運動等を背景にLGBTQ+の存在の可視化が進んできた。その蓄積が着実に重ねられてきた今、LGBTQ+を取り巻く環境は大きく転回しようとしている。例えば、日本の現行制度において婚姻は異性間のみ認められているが、全国各地で同性パートナーシップ、ファミリーシップに関わる権利保障を目指した施策の検討が進みつつある。しかしながら、現役の地方・国会議員によるLGBTQ+に対する差別発言や、SNSを中心としたトランスジェンダー排除を助長するバックラッシュなどが相次いで見受けられ、依然として日本に住むLGBTQ+にとっては生きづらい状況がある。

このような状況を打破するために、教育分野においてはいくつかの方針が打ち出されてきた。例えば、2017年に文部科学省は「いじめ防止対策推進法」に基づく「いじめの防止等のための基本的な方針」を改定している。その改定の目的は、性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対するいじめの防止であり、「性同一性障害や性的指向・性自認について、教職員への正しい理解の促進や、学校として必要な対応について周知する」求めが記載された。また、同省が2022年12月に公開した『生徒指導提要』では、「12.4 「性的マイノリティ」に関する課題と対応」において、教職員の理解を深めること、児童生徒の人権意識の醸成を図ることの重要性のほか、学校内での対応例、学校外との連携・協働のあり方についても記載されている。

大学に目を移すと、学生支援の文脈で「多様な学生」の教育・支援の必要性に対する認識が少しずつ浸透してきたといえる。高等教育の学生中心パラダイムへの改革を求めた『大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－』には、支援機能への学生スタッフの登用、自主的活動としての学生サークルの支援的可能性に着目する記述もあり、これらの活動を大学側が下支えするというボトムアップ的支援の重要性が認識されつつあるといえよう。

LGBTQ+学生に対する支援は、2015年の一橋大学アウティング事件<sup>1</sup>以降、自殺対策やメンタルヘルス上の問題への対応を中心として、取り組みを展開する大学が徐々に増加している（河嶋, 2020）。多くの大学に共通する主要な取り組みは、ガイドライン作成や支援部署・相談員の設置など、トップダウン的な施策が中心である一方、前述の学生中心パラダイムへの呼びかけに呼応するように、いくつかの大学では学生スタッフを支援組織に登用する試みもみられはじめている（日本学生支援機構, 2023）。

他方、学生サークルに着目した研究としては、LGBTQ+関連サークルと研究者らが共同調査を行ったものがある。これらの先行研究は、LGBTQ+学生が大学の中で抱える困難と支援ニーズについて、その情報提供源として学生サークルの可能性に着目するものが多く（例えば小林・金・佐藤, 2017; 織田・澤田・吉川・飯塚・梶谷・高林・武田, 2022）、LGBTQ+関連サークルの教育・支援的機能や、活動そのものについての検討はほとんど見当たらない。また、当該サークルに参加する非当事者学生には焦点が当たらず、当事者・非当事者間で生じる相互作用的關係についての視点は欠けているといえる。

そこで本研究は、LGBTQ+当事者学生および非当事者学生が共に活動するサークルに着目し、活動メンバーらは活動を通して何を学び、いかに変化してきたのか、これらの活動がいかにして継続し、参加学生らがいかにして活動し続けられたのかについて明らかにする。本研究によって得られる知見は、本活動や活動メンバーに対して実践的フィードバックをもたらすという参加型アクションリサーチに紐付いた意義（第4章で詳述

する)のみならず、日常的な支援・教育機能として学生サークルに視点を向け直し、LGBTQ+当事者学生と非当事者学生が相互に学びあい、社会正義に向けた行動を取ることを促進する共同型教育実践の開発に寄与する。さらに、共助・相互扶助としての学生支援の経験的知見を産出する本研究は、財政緊縮に悩む日本の大学における学生支援に重要な示唆を提供することを可能にするといえよう。

## 2. 先行研究

社会に存在する差別の解消を目指した教育実践として、被抑圧者が社会変革の主体となっていく問題解決型教育を提唱した Freire (1970=2011) や、その問題意識を引き継ぎながら今まで発展し続けている批判的教育学が注目を集めてきた。批判的教育学の分野から LGBTQ+に着目したものとしては、Loutzenheiser & Moore (2009)がある。Loutzenheiser らは、反同性愛嫌悪・反規範の施策・プログラム・教育方法・カリキュラムが、より安全な学校のいかなる概念にも統合的なものとしてみなされるよう、学校現場に携わるあらゆる者の市民的力量・能力が学校文化を批判的に読みながら育成されなければならないと論じている。批判的教育学の理念を継承する本活動においても、あらゆる者の参加機会と、異性愛主義や男女二元論に対抗する批判的な問い直しが含まれなければならない。

また、本研究で着目するサークル活動との類似性から、英米圏の教育機関に多く見られる GSA (Gay-Straight Alliances、もしくは、Gender and Sexuality Alliances) について触れておく。GSA は、LGBTQ+やアライの学生で構成される生徒主導の組織であり、LGBTQ+とアライの生徒ためのコミュニティの構築や学校内外で生徒に影響を与える問題に取り組むことを目的に活動している (GSA Network HP)。この GSA に関して、アライとして参加する非当事者の背景や現在のエンゲージメント状況などを分析する量的研究が重ねられる一方 (Goldstein & Davis, 2010; Scheer & Poteat, 2016; Goldstein, 2017 など)、エスノグラフィーやインタビュー調査によってアライが GSA で活動する動機や GSA に対してもたらした影響、GSA を通じたアライの内省などを明らかにした質的研究 (Mayo, 2013; Lapointe, 2015; Levesque, 2019) も蓄積されている。なかでも Lapointe (2015) は、GSA の活動を通して、LGBTQ+の非当事者が当事者と親密になったり、当事者に共感したりすることや、非当事者だと認識していた生徒も「Othered (非規範的性)」だと感じた経験があったことを省察し性の多様性に対する肯定的態度を獲得したこと、意識向上を受けて GSA 外で遭遇する同性愛嫌悪への対処に苦しむ様子があることを明らかにしている。これらの研究は、当事者と非当事者がともに活動していくための示唆が得られるものの、同じ活動に携わる者同士の認識について詳細な言及はなく、この点を課題として引き受ける必要がある。

以上の先行研究の検討から、本研究においては活動メンバーが互いをどのように捉えていたのか、すなわち、関係性を分析の軸に据える。

## 3. 組織と活動の概要

本研究が着目する学生サークルは、学生の主体的な社会活動を促進する目的の下、筑波大学に設置されている学生組織立ち上げ支援プログラムの後援を受けて発足した。発起人は、澤田 (執筆者) であり、「LGBTQ+を取り巻くイシューについて学び、変化のために行動すること」を団体の目的とした。活動期間は、2022 年度 3 月から翌年度 9 月、

2024年度10月から同年度3月までの二期である。前期10回は、LGBTQ+の基本情報やかれらを取り巻くイシューに関する勉強会を行い、後期10回は、学びに基づいた社会変革的アクションの計画、実施にあてた。活動は原則月に2回、各回2時間ほどであった。活動メンバーは、口コミや授業での組織紹介を通して募り、計19名(大学院生・学部生、当事者学生・非当事者学生を含む)が所属し、毎回の参加人数は概ね10名程度であった。

前期の勉強会では、まず、ジェンダー・セクシュアリティに関する用語と概念、法制度の現状、クィア・アクティビズムや学生による市民的行動に関する歴史等について学習した(第1回～第3回)。その後、ヒューマンライブラリーの手法を用いて3名の当事者学生にそれぞれのライフストーリーを語ってもらい、各ライフストーリーをもとに聴者らの経験を共有したり問題構造を議論したりする時間を設けた(第4回～第10回)。後期の活動では、全体を3チームに分け、チームごとに「筑波大学固有のイシュー」に焦点化したアクションを計画、実行した。実行に移したアクションは、(1)アライの教職員を可視化し繋ぐイベントの実施、(2)筑波大学関係者による体験談の収集と啓発資料作成、(3)つくば市のLGBTQ+の若者の居場所づくりイベント実施の3つである。

活動発起人の澤田は本活動の立ち上げに際し、コミュニティ・オーガナイズング(以下、CO)の理論を参照しながら活動デザインを設計した。そのため、本組織の活動内容のより具体的なイメージを共有すべく、ここではCOの概要を説明する。そもそもCOとは、特定の社会課題の解決に向けて市民が団結的に行動を起こすことを指し、米国を中心に注目されてきた社会正義のための実践である。COの理論と研究史を概括した室田(2024)によれば、COの定義は様々でありつつも、公民権運動以降のCOが、共同体の組織化という「コミュニティ・ディベロップメント」の側面と、社会的不正義是正のために闘うという「ソーシャル・アクション」の側面を含むものとして理解、検討されてきたという(36-38)。前述した本活動の二期制はこの二側面に対応する。すなわち、前期の勉強会を通してメンバー間の目的意識と結束力を高め(コミュニティ・ディベロップメント)、後期の社会変革的アクションを通して社会的不正義是正のために闘う(ソーシャル・アクション)という論理からなるのである。特に、前期の勉強会期間においては、当事者学生のライフストーリー共有とそれに根差した意識・理解深化のための議論、第一回目の参加動機共有の時間を通して、CO実践の一要素である「パブリック・ナラティブ」を構築し、それによるメンバー間の目的意識と結束力向上に努めた。より詳細に言えば、本活動では各人のストーリー("story of self")の共有から始まり、そこで語られた個々の経験や価値観を、本組織・本活動全体にとって重要なものであることを共有し、語りを編み直し("story of us")、その価値に基づいた社会正義のための行動や戦略を練り、語る("story of now")ことで、共通の価値基盤を持ちながら行動を共にできるような活動デザインを採用した(同上: 45-46)。

#### 4. 研究手法

活動メンバーの学びや参加継続の可否をめぐるポリティクスの解明を目指す本研究において、本活動の文脈に即したローカルな知を活動内部から事例的に抽出することが必要になる。また、状況変革を志向する批判的アプローチの立場をとる本研究は、現象理解という認識論的・学術的意義にとどまらず、本活動の継続や発展、さらにはメンバー間の関係深化や行動継続に寄与するという存在論的・実践的意義を有することを目指す。以上のことを踏まえて、本研究は参加型アクションリサーチの方法論を援用した。Brown

& Rodriguez (2009: 1-2) によると、参加型アクションリサーチとは、調査対象となるコミュニティのメンバーらと共同し、かれら自身が変革主体となるための、ローカルな場に即した知識を産出することを目的とする方法論である。この方法論においては、研究者と研究対象者の間の区分は薄められ、研究対象者も「研究者」としての役割を担いながら共同する。そこで得られた知見の妥当性は、伝統的科学研究が志向する客観性という究極的には達成不可能な指標ではなく、コミュニティのメンバーがどのように、どの程度研究に参加したかという点に委ねられる (3-4)。本研究では妥当性に関するこの要綱を反映し、研究課題の設定、データ収集、データ解釈と分析、執筆等すべての段階に活動メンバーが参画し、トライアンギュレーションを通して、データとその解釈、知見の妥当性を高めるよう努めた。

データ収集の方法は、コミュニティ・オートエスノグラフィーとフォーカス・グループ・インタビューである。オートエスノグラフィー (Autoethnography: AE) とは、「個人的経験 (auto) を用いて文化的テキスト、経験、信条、実践 (ethno) を記述したり解釈したり (graphy) する研究手法」である (Adams, Ellis, & Jones, 2017: 1)。この手法では、研究者が自身の経験を省察し、その経験を社会文化的背景や他者との関係の上に再置することで、自身が置かれた社会についての知見を得ることが目指される。従来、AE は一名の研究者が自身の経験を省察する形式で用いられてきたが、共同型オートエスノグラフィー (Collaborative Autoethnography: CAE) という手法が近年登場している。CAE とは、通常の AE と異なり、複数名の研究者同士が協働的に AE を作成するなかで、互いの経験の再構築に関わりあったり、グループ内共有によって洞察を深めあったり、探究の取り組みを支援しあったりする手法である (Chang, Ngunjiri, & Hernandez, 2013)。先行研究章でも確認したように、本研究では活動メンバーの認識的・行動的な相互作用を観点に含み込むため、関係論的視点を可能にする CAE は有用な手法である。そこで本研究では、とりわけ Toyosaki, Pensoneau-Conway, Wendt, & Leathers (2009) の CAE を用いた研究を参考にし、この方法を取り入れた。具体的には、Toyosaki らの論文を参加者全員で一読した後、共同編集可能なオンライン・ドキュメントを用いて CAE の作成に取り組んだ。CAE 作成の手順としては、活動発起人である澤田が最初に AE を書いた後、そこに自身との共通点を読み取ったり共感したりした別の研究者が、順不同で自身の AE を書き足すようにした。CAE の執筆期間は、2023 年 12 月から 2024 年 2 月である。また、この期間内に並行してフォーカス・グループ・インタビューを 2 回 (計 180 分) 行い、研究課題を反映して、①活動を通して学んだこと・変化したこと、②活動に関わり続けられた／続けられなかった背景というテーマについて、インタビュー・データを収集した。インタビュー・データは、録音音声を書き起こしテキスト・データとして整理した後分析にかけた。

得られたすべてのテキスト・データは、佐藤 (2008) に倣い、帰納的コーディング (オープン・コーディングと焦点的コーディングから成る) を行い、演繹的コーディングとこれを反復する方法で、コードの精度を高めた。前述のとおり、分析プロセスにはすべての研究者が参加しトライアンギュレーションを随時行った。

## 5. 研究結果と分析：研究課題① 活動を通じた学習と活動メンバーの変化

本章では、研究課題 1 として設定した、活動メンバーらは活動を通して何を学び、いかに変化してきたかに着目し、活動メンバーにとっての本活動の意義を考察する。

### 5.1. 共感的理解・態度の獲得

本活動ではライフストーリーを個人の具体的な物語と定義し、同意の取れた当事者学生から、ライフストーリーを聴く機会を設けた。ライフストーリーを語る／聴くという活動は、活動メンバーが自己を見つめ直す契機として機能する。まず、自身を非当事者として認識している聞き手が、どのように語りを聞き取ったかを確認しよう。

自分の経験を語っている人を目の前にしている。その人が色んなことを思い出して辛い顔をしている、そういうその空間だったりとか、その当事者を目の前にしているその空間だったりとか、その当事者の表情、声、すべてのもうなんか、その存在が目の前にあるってということだけで、すごくこうリアリティが増して（後藤 FGI）

ライフストーリーを聞かせていただいたのは、非常に自分にとって貴重な経験で、なんというか、この人たちと一緒に生きていこうと思って、活動しているんだっていう、なんていうか、意識に繋がっていて（萩原 FGI）

後藤の語りからは、当事者学生が目前で自身の経験を語る姿に触れ、当事者が生きる生活についての「リアリティ」とその理解が深まっていったことが窺える。また萩原の語りからは、ライフストーリーを聴くなかで、自身がこれから共に活動し、共に生きていこうとする他者について「当事者」という抽象的な像のみならず「この人たち」という具体的な像を抱くようになっていったことが窺える。以上のことは、ライフストーリーを聴くという活動を通して、「当事者」という抽象的な概念との共存ではなく、今ここを生きる具体的な他者との共生へと意識を移行していった様子と読み取れるだろう。

具体的な他者—身体や感情を伴った一個人である他者—としての当事者と出会うことは、ライフストーリーを話す者に対する共感性を高めることと強く結びついている。

感情に共感したって感じかな。その経験とかではなくて、悲しいって言っている人が目の前にいて、すごくこう、一緒に悲しくなるみたいな感じっていう感情の共感。（後藤 FGI）

また、当事者学生によるライフストーリーの共有は、自身を当事者と認識するメンバーにとっても自らと他者との間に感情的・経験的な共振を見出す重要な契機となっていた。

聞いてて辛くなるなみたいなのはあったかもしれないんだけど、なんか、時折、なんだろう、楽しさのあるエピソードが出てきたりして。...なんだろうな、確かに当事者としてのライフストーリーを聞いたかもしれないんだけど、当事者が普通に、普通にというか、実際に生活をこう送っていることを、こう、自分も普段送ってるけど、やっぱりそうだよ、他の人だって送ってるんだよねみたいなことを再確認するすごい重要な時間だったと思う...（正木 FGI）

正木は、他学生のライフストーリーを聴き、当事者としての自身の経験とそれを重ね

合わせるなかで、感情的・経験的な共通性を見出したと語る。ここでは、辛さや苦しみという負の側面のみならず、楽しさなどの正の側面をも含み込んだ、「当事者」と称される者の人格の全体性に共感をしているようだ。以上のように、ライフストーリーを聴くという活動を通して、聞き手は語り手の具体的な経験や感情に触れることでリアルな当事者像と向き合い、共感的な理解や態度を示すようになったといえよう。

ただし、共感的理解や態度を示しつつも、安易な共感や、自己の経験との同一視を避けようとする慎重な姿勢についても語られたことは同時に重要である。

...同じ傷として感じなくても、おかしいのはわかる。...やっぱそこは自分自身が問題となれる、なりやすい対象だからっていうのもそうだと思うんですけど、だけど、共感っていう文脈でなくても、そこに最大限共感しようとする寄り添いはありつつ、(共感)しようとはして、ただどできなかつたという文脈もありつつ、でもやっぱり問題でしょそれはっていうふうに相手を見るっていうことに関しては、そこはすごくやっていたのかなと思う。(藤島 FGI)

LGBTQ+当事者学生から語られたライフストーリーからは、当事者として生きることの具体的な困難が垣間見えることもあった。そのような語りから、語り手と自身との経験的差異を前にして、「同じ傷として感じ」ることのない聞き手は、「私が共感していい話じゃない」(後藤)として、全き共感の不可能性や暴力性に意識を向けてもいく。このようなバランス感覚を有した共感的理解・態度の獲得には、次節で確認する、自身の立場性についての省察が重要であったと捉えることができるだろう。

## 5.2. 自己省察の深化

前節では、ライフストーリーの聴取が他者への共感的理解・態度の獲得を促したことを指摘した。本節ではこれに並行して、ライフストーリーの聞き取りを通して、各メンバーが自己省察を深めていった様子について確認する。

ストーリーを聴くなかで思うのは、自分は多分、そのストーリーのなかで出てくる、「している側」、こういうことを受けたっていうふうに語ってくれてるなかでの、その相手の側に自分は乗られる存在なんだなってことをすごく感じながら聴くしかなくて。(藤島 FGI)

Aみたいに自分のセクシュアリティを隠して悩んでいる人がきつといただろうし、自分もそれにきつと気づいていなかっただろうし、なんか、そういった、そうね、自分の言動ひとつひとつ思い起こして反省しちゃう会になったかなと思うな。なんか私はやっぱり、今まで 全然気にしてなく生きていたけれども、ジェンダー・セクシュアリティが何が何であろうと、その友達の。気にしてないつもりではあったけど、でもやっぱり、初めて会った時に、こう、見た目とかで、この人は女性だ、この人は男性だっていうカテゴライズして、男性は女性を好きになるっていう、なんか固定概念的なものをやっぱ持って、いろんな人に接していたなとか...(後藤 FGI)

藤島は当事者が語る物語に登場する、「嫌な思い・経験」を与える存在を加害側と認識した。そして実際に加害をする／しないに関わらず、自身も加害側になりうる存在だと自省している。後藤も藤島同様に、当事者の語りのなかで加害者としての自分を想起し、自身が抱えてきた固定概念や、周囲にいるはずの当事者への無配慮といった自らの行動・意識を省みた。この二人に共通するのは、他者のライフストーリーを聴くことを契機として、加害しうる存在としての自己を認識しなおしたことである。

そのうえで藤島は、当事者が経験し感じてきた抑圧を経験せずとも生きることができるという自らの非当事者性を強く認識するようになっていく。

誰かの話聞いたりとか、その子に何があったのかっていうのを、やっぱ自分はずごく、なんだろう、話聞いてて(自分自身が)思わなくてもよかったのかなっていうところはすごく感じてしまっていたから。(藤島 FGI)

自分はこのライフストーリーをこう聴く機会とか、あとはなんて言うんでしょう。色んな読み物読んだりとかしなかったら、すごくヘテロな、ヘテロでしかなかったんだらうなって思ったら、ちょっと、なんでしょうね、うまい言葉が見つからないんですけど、怖くなっちゃったなっていうところはあります。(藤島 FGI)

このように、他者が経験する抑圧を自身は経験せずに生きることができるということは特権として読み取ることができる。特権とは、「持って生まれた『属性』(性別、人種・民族、社会階層、性的指向、性自認等)すなわち『アイデンティティ』によって自動的に受ける恩恵であり、原則として努力によって得たものではない」(出口, 2021: 73)。藤島はライフストーリーを聞いて自身を相対化し、自らの属性を見つめなおした。その際、当事者が苦しんできたことや考えざるを得なかったことの多くが自らの身に起きなくても済んでいたということ自省し、自身が特権を有していることへの認識を深めている。

ライフストーリーを聴くなかで自身の特権を意識したのは、非当事者として生きる活動メンバーだけではない。木原は当事者としてライフストーリーを語った後に、他者のライフストーリーを聴くなかで自身の当事者性を捉えなおしていく。

(自身のライフストーリーを話した後に B さんのライフストーリーを聞いて)自分のアイデンティティとしてノンバイナリーってアイデンティティがあったんですけど、そこを、そこについてあんまり考えてなかったというか、なんかあんまり言語化してなかった時に、B さんの話を聞いて、なんかその、性別とかジェンダーについて、自分があんまり考えてなかったんだなっていうのが、こう、はっきりした感じがしましたね。(木原 FGI)

木原はノンバイナリーであり、男女二元論のなかで生きる苦しさを感じつつも、自身のジェンダーについては「あんまり考えてなかった」という。そのような状況のなかで、男女二元論的規範を有する社会とより深刻に向き合わざるを得ない他者 (B さん) のライフストーリーを聞いたことにより、ジェンダーについて今まで深く考えずにいられたという自らの特権を自覚するに至った。



### 5.3. 行動変容

前節で確認したように、ライフストーリーを聴くなかで、活動メンバーらは自己省察を深めていった。このことは実際に行動を起こすことへの意欲にも影響をもたらしている。

ジェンダー・セクシュアリティ問題に関して、何でしょうね、学ぶだけじゃダメでしょ...勉強して終わりってところだけではやっぱり足りないなというか、それじゃ、それじゃいけないんじゃない。っていう気持ちは、すごくこの活動を通して感じた... (藤島 FGI)

自分は「LGBTQ+に寛容だ」という姿勢を見せてきたけど...でもその言葉だけでは、助けたい人も、助けられない。ただ他人事になっているだけ。一緒に闘うこと、一緒に声を上げることが大切だなって思う。(後藤 AE)

マイノリティ性によって生きづらさを経験する人がいることを意識し、自身の特権性を認識した藤島や後藤は、そうした生きづらさを抱える人のために、自身が具体的に行動を起こすことの必要性を感じるようになったと語る。ここでの「具体的な行動」としては、組織概要に示した本活動におけるアクションへの貢献に加え、ジェンダー・セクシュアリティにおいてマイノリティ性を有する人々を傷つけるような周囲の言動を看過せず、批判や訂正を行うことが挙げられる。

特権の自覚だけではなく、「当事者」のライフストーリーを聞き、話し合いを行った経験に基づく知識の増加も、行動変容を促した。

...この活動を通して単純に知識が増えた。知識が増えることで、自分が思う言葉、思う気持ちを言語化して、それを人に伝えることができたから、周りの人に ジェンダー、セクシュアリティに関して、感情だけでなく知識を持って語れる、イコール説得できるっていうところがすごく私自身の強みになったなと思っていて。(後藤 FGI)

...ひとくくりに当事者とされる、自分でも語り得ない、知り得ないところっていうのを少しずつ...吸収できてるなっていう風なところで、少し、なんて言ったらいいんですか。うん、そこは自信。自信に変わったとまではまだいかないかもしれませんが、なんか根拠になったかなっていう、根拠の1つにはなりつつある... (正木 FGI)

後藤は活動を通して、ジェンダー・セクシュアリティについて人々を取り巻く現状や問題を、より具体的に知ることができた。後藤はこの知識の増加が、周囲の人に問題意識を共有する際に役立つと感じている。これは、論理的説得力の向上という点でも後藤の行動を支えているが、同時に、知識に基づいた説得ができるというポジティブな自己意識の形成に寄与したといえる。また、自身が当事者であるという意識を持って活動に参加していた正木も、自身の経験による知識では含み切れない当事者性への知識・理解・視点などが広がったと感じ、そこから活動・行動を続ける「根拠」を得ている。このよ

うに、知識の増加は、活動メンバーが行動に従事する上での心理的土台を強化したことが読み取れる。

また、自らの行動変容の背景として、問題意識や行動を共にする他者の存在を挙げる例もみられた。

「自分ノンバイナリーなんで。」みたいに言ったり、うん、することが、結構増えたなっていうのがあって、で、そういう時に、やっぱり、思ってるような反応は必ず返ってこない...自分は割と、カってなって、すごい怒って、で、ちょっとこう、また思い出して、また怒るっていうのをずっと繰り返すタイプなんですけど、でも、それを怒るのが自分1人だった。今までは、自分1人とか、なんかすごい仲いい人だけとかだったんですけど、そこがもうちょっと共有できるようになって、で、うーん、なんか、分析してくれたりとか、一緒に怒ってくれたりとかっていうのが、そういうのをこう通して、ちょっとメンタルが強くなってきたかな (木原 FGI)

木原はカミングアウトという行動を起こすことが増えた<sup>2</sup>。木原は、この行動変容の背景として問題意識を共有できる仲間の存在を挙げ、これが行動によって生じる負の反応に対する心理的負担をやわらげたと述べている。

相浦も、この活動を共にしている仲間の存在が、行動を起こす上での心理的な支えになっていると感じている。

私は活動を通じて傷つきにくくなった。差別的な言動を見聞きしても、「それをおかしいと訴える仲間」が私の内側に共に立ってくれるようになったからだ。(相浦 AE)

自分が例えばこう、何か問題に直面した時とか、何か言われた時とか、そういう自分自身が他者に対して働きかけができる場面での行動の自信というか、そういうところに関しては、かなりこの活動があることが支えになってる部分はあるなっていうふうに思います。(相浦 FGI)

行動を起こすということは差別的な言動を看過しないということであり、その結果、反発や否定的な言動に接する機会（あるいは問題に対して無関心な人々の存在を意識する機会）が増すと考えられる。そのため、行動を起こすことで心理的負担が高まる場合がある。このような状況にあって、問題意識を共有することのできる活動メンバーらの存在は、行動を起こそうとするメンバーらの心理的な支えとなっていた。

そして、実際に行動を起こした活動メンバーは、それによって活動者としての自信を獲得していった。

私たちがやってることってすごく大事なことで、恥ずかしいと自分たちが思っ  
てはいけないっていうのをすごく思って。で、なんか、この活動に対して誇らしく思っ  
たし、やっぱこう、学ぶだけじゃなくて、その行動まで繋げられたことに関して、  
すごく誇りを持てるようになったかなって思います。(後藤 FGI)

ビラ配ってて、活動してる感があって、それはとっても楽しかったというか、やりがいはとってもあったなっていうの、 思います。授業で配った時とかも、なんか、LGBTの活動してますって、...そういうアイデンティティを、ま、持つっていうのは、うん、自分にとっては、なんか、自信に繋がる というか、それプラスで、うん、 なんか、当事者としてというよりかは、活動してますっていうところのアイデンティティの方が、自分としては、今は大きいのかな (木原 FGI)

後藤と木原は問題のある現状を変えるために行動を起こしているという認識が活動者としての自信になったと述べる。さらに、行動を起こすことから得られたこの自信は、活動者としての「誇り」や「アイデンティティ」の形成に繋がったといえる。

以上 5.1 では、本活動が、視野の広がり、意識・認識の変化、問題意識の強化といった活動メンバーの内面的変化をもたらし (5.1、5.2)、それが実際に行動を起こす場面へもポジティブな影響を与えたことを示した。さらにメンバーらは、行動への従事を通して活動者としての自信や誇り、アイデンティティも獲得した (5.3.)。心理的变化が具体的な行動へ影響することを考慮すると、この自信も更なる行動変容へ正の波及効果を持つと推測できる。

## 6. 研究結果と分析：研究課題② 活動継続を可能にした力学と背景

本章では、研究課題 2 として設定した、LGBTQ+当事者学生・非当事者学生が共に本活動に関わり続けられた／続けられなかった背景に着目し、活動メンバーを取り巻く力学と、活動継続のためにメンバーらが取った戦略について考察する。

### 6.1. 繋ぎ、切り離す、情動

本活動は、発起人である澤田の心的な痛みから立ち上がった。活動の立ち上げに乗り出した頃の思いについて、澤田は次のように記述する。

2023 年 2 月 3 日、同性愛者が「隣に住んでいるのもちよっと嫌だ」、「見るのも嫌だ」という差別発言が、当時の首相秘書官によってなされた。勇敢な記者、新聞社が、オフレコ取材の定石を破ってこの事実を記事にしたその夜、大学院生の私は、高校時代の暗い記憶を再訪することとなった。...あの夜、私は、私や私の人生、大切な人びとの命を、「国」によってズタズタに引き裂かれた気持ちに苛まれていた。 ...異性愛者・シスジェンダーのかれら（多くは高校時代の周囲の生徒と同様の夢を持っているだろう）が、私の絶望を、孤独を、悲痛を、怒りを、諦めを、苦しみを、 どこまで理解してくれるのだろう。...共に怒ったり悲しんだりすることができる、LGBTQ+が今より生きやすい社会を作るために共に行動することができる、そんなコミュニティを創ろうと思いたった。 (澤田 AE)

政治家による差別発言を受け、発起人の澤田は自身が「暗い記憶」と意味づける高校時代に引き戻された。過去の記憶から立ち上がった「絶望」「孤独」「悲痛」「怒り」「諦め」「苦しみ」は、澤田にこれらの負の情動を共有しあえるコミュニティを希求させた。これらの情動は、活動メンバーに伝播、共有され、次第に引き受けられていく。

...大事な友達にあきら(澤田)の思いをずっと近くで聞いていた友達だからこそ、一緒に何か活動したいと思いたった。それだけでない。あきらはいつも私のしんどい時に、一番に寄り添って共感し、やさしい言葉をかけてくれた。でも、私はあきらにそれほど寄り添うこともできず、助けになれることもできていない自分がやるせなかった。自分も、誰かのためになりたい。いま、しんどい人がいるなら支えたいという気持ちもあったのかもしれない。(後藤 AE)

後藤のオートエスノグラフィーでは、「寄り添う」という行為の交換期待に応答できない自身が嘆かれつつ、「しんどい」という情念を軸に、後藤自身と澤田、および澤田の活動を通してこの先出会うであろうしんどさを抱えた諸個人が重ね合わせられていく。Deluezeの情動論を整理した野澤・難波・難波・仁井田・近藤(2017:6)によれば、情動は「間主観的に生起」し、これによって個人は「他との区別が消滅し、奇妙な類似性を帯び」る。澤田の情動の発露によって、後藤の身体は「他の個体と呼応する身体」(同上:6)となり、情動を受け取った。この情動は、後藤と澤田とこの先出会うであろうしんどさを抱えた諸個人との区別を曖昧にし、「しんどい」思いを類似性の軸に据えながら後藤を活動に結びつけた。つまり、後藤は「しんどい」という情念を抱えている／抱え得るという点で自身と他者を重ね合わせ、活動に巻き込まれていったのである。

以上のように、情動は活動立ち上げと活動メンバーの参与開始場面で有用な資源として機能していたといえる。一方で、活動過程を振り返る記述からは、活動メンバーを活動から切り離したり、メンバー間の緊張関係を形成したりするものとしても情動が機能していたと考えられる。とりわけ後藤は、アライとして活動に関わり続けたいと強く願いつつも、自らの加害性・非当事者性を基盤とした恐怖や恥も感じており、葛藤に揺れていたことを記している。

正直、この活動に参加するのは「しんどい」ことが多かった。私は、言葉一つ一つ気にして話した。誰も傷つけない。その一心だった。そうすると、何も言えなくなってしまう。そして、疎外感まで感じてしまった。「私は、ここにいていいのかな。」「私って、結局何にもできてないな」って、自分のことが嫌いになった。私の大切な友達、あきらとゆうとが頑張ってるから、私も頑張りたいと思って何とか、参加していた。けど、正直、もう、LINEのグループも抜けたって思うほど、「しんどい」時はあった。でも、逃げられるのってマジョリティの特権だよなって。「ああ、自分ってほんと無責任」ってまた自分が嫌いになった。どうしたらいいんだろう。「つらい、しんどい、でも、誰にも言えない」そんな日が続いた。今は、みんなが大好きだけど、あの頃は、みんなが「敵」に見えた。私の発言で、怒らないかな、悲しまないかな、攻撃されないかな、「怖かった」。そう、私はこの活動に参加することが徐々に「怖くなっていった」。(後藤 AE)

「さあ、活動しよう」という話が上がった時、「身近な人へのアクション」が一番すぐに行動に移しやすい。まずは、身内から変えていきたいと言う話が挙がった。私もその意見に同意見だった。しかし、その時に、いつも一緒に飲んでた友達がふと頭の中に浮かんだ。友達の言動を正そうとするなかで、「私は、大事な友達に嫌われてしまうのかな。」と、すごく怖かった。でも、目の前の仲間の顔を見たら、そんな

ことを思ってしまったている自分がすごく恥ずかしかった。気づけば、「自信がない」と、みんなの前で涙していた。みんなの顔が見れなかった。「ああ、もう今まで何を頑張ってきたんだろう」「ああ、何を言ってしまったんだろう」と思うなかで、やっぱり「怖い」「自分にはできない」といういろんな感情が混ざっていた。実際、私は親に対して LGBTQ+について、「ちゃんと考えてほしい」と、同性婚の話やトランスジェンダーの人たちの話を一度したことがある。親も理解しようと寄り添ってくれたが、最終的には「他人事」としてしか考えてくれなかった上、「そんなの考えてたら、美句がしんどいから、あんまり考えない方がいいよ？」って言われた。その言葉に、あきれた。「ああ、もう話すだけエネルギーつかっちゃう」って思った。私が、身近な人へのアクションに対して、「自信のなさ」や抵抗感をもったのは、家族に対し行き場のない感情を抱いた経験も影響してるのかな。その後、みんなにしばらく会えなくなった。(後藤 AE)

後藤は、アライとして本活動に関わり続けようとするも、自らの潜在的な加害性や、そのことによって非難や攻撃の対象になりかねない状況に対し、強く不安感を抱いていた。さらに、活動外の身近な他者に対し、アライとしての是正的行動がとれないこと、行動をとることに保身的な考えを持ってしまうことに関して、不安や恐怖、自己を恥じる思いといった情動を抱くようになっていった。さらに、重要な他者である家族の無理解に触れ先述の思いを深めたことで、後藤は活動から距離を置くようになった。アライ自らが是正的行動を取ることに過度のプレッシャーを感じる傾向にあるという指摘は、GSA に関する先行研究と重なる (Lapointe, 2015)。後藤の場合、このプレッシャーに加えて、アライに求められる是正的行動が取れなかった自己に対する批判的自省が、アライとして LGBTQ+コミュニティに関わり続けることへの恐怖感や不安感の増発を喚起したといえるだろう。

後藤が抱いた恐怖感や不安感は、LGBTQ+当事者といかに接するべきか、アライとしていかに行動するべきか、という点に由来する過度なプレッシャーによるものであった。一方で、当事者と向き合う際に生じるプレッシャーは、ある種の「緊張感」として肯定的な役割を果たす場面もあった。

ちょっとした緊張感というかがあると私は思うんですけど、その、うーん、なんか当事者、ま、もっと当事者性と、それをこうまなざす人っていうのが。ある意味、そういう構造もあるのかなと思って。なんか、その緊張感も、なんかうまく作用したのかなって思います。...仲が悪くてじゃなくて、なんですかね、誠実に向き合わなきゃっていう気持ちですね。(木原 FGI)

話してもらってという時点で、あなたは当事者ですよっていうふうに、こちらがまなざしていることを表明する っていう、なんかこう、暴力性というか、そこに対する責任が伴う。(萩原 FGI)

木原と萩原の語りからは次のことが窺える。ライフストーリーの共有場面において、非当事者が当事者をまなざすという構図や当事者に語ってもらうという営為が、ある種の「緊張感」を生み出し、この緊張感によってこそ、活動メンバーは活動の暴力性や、

自らと他者との間に横たわる非対称的な権力関係に「誠実に向き合」うよう促されていた、ということである。

HIV／エイズアクティビズムを情動論の観点から分析した Gould (2009: 439-441) によれば、情動は人々の政治的生活にとって基礎的な部分を成す。情動は、個人や集団がとる行動を完全に規定しないまでも、行動を刺激、抑制、強化、緩和、妨害、促進し、活動の勃興・発展・衰退のいずれの段階にとっても重要な要素となるという。澤田が抱いた負の感情とその共有によって発起した本活動は、その活動の過程で、当事者／非当事者間の非対称性の可視化や、メンバー間の差異への認識深化から生まれた、新たな情動（恥、恐怖、不安、緊張感など）によって、一部のメンバーに参加継続を忌避させたり、誠実な向き合いを促したりした。

## 6.2. 差異の認識と二項対立的立場性の攪乱

前節では各活動メンバーの参加実態を考える際に「情動」が重要な要因であることを明らかにした。本節では、6.3.で述べる、アイデンティティや経験の大きく異なる活動メンバー間の連帯の前提となった、活動やメンバーの認識に対する「当事者／非当事者」という二項対立的な枠組みの影響に注目する。

まず、「当事者／非当事者」枠組みを意識することによって、活動への動機づけを強める当事者の姿が見られた。活動当初、発起人であり当事者を自認する澤田は、共に活動する非当事者メンバーを、自らが抱えていた苦しさや被っていた問題に巻き込んでしまったことに戸惑っていた。

僕の問題として持ってた苦しさを共有できる場ができたっていうことは、みんなが苦しまなくてよかったもので、苦しみ始めているっていう思いもあるんですね。

(澤田 FGI)

その一方で、非当事者メンバーの多くは、アライとしての行動を続けてきた。このようなアライの姿は、当事者メンバーに対して重要な影響をもたらしていく。

アライの人たちとかが、なんか思ってたより、すごい、なんか、すごいいい人たちで...自分の思う社会一般の人とか、なんかLGBTQってなんですか、とか...知ってたとしても、まあ大変だねみたいな、でなんか活動頑張ってるねみたいな、なんかそんな感じの（反応）をイメージしてたんですけど、いや、自分よりも行動してる人がいて、いや素晴らしいなっていうので、あの話聞いていただいた時も思ったし、なんか希望を、希望を見出した（木原 FGI)

よう業を背負ってくれたなというのをすごく思っていて。うん、なんか、だからこそ、その背負ってくれた人がいるから、遠ざかってるなって思ってた時に、もう1回、あ、じゃ戻らなきゃみたいになるかなって感じ。（正木 FGI)

僕が1人でこう背負ってきたはずの、もっと言えば、LGBTのコミュニティが背負ってきたはずのものをアライに分散していく過程の中で、自分が離れるのはダメだろうっていうのは確かに感じたなっていうのは思ってた。それを多分結構明示的だっ

たのは、ゆうとがチラシを配ってくれてたっていうのが僕の中で勝手にゆうとを非当事者として見てたっていうのがあるんやけど。それがアライがやってくれてて、わいが動かんのはダメやろっていうのはずっとあった (澤田 FGI)

ここでは、非当事者メンバーのアライとしての行動が、当事者にとってのある種の「希望」として語られている。またアライの行動は、当事者らが活動続ける支え・理由の一つとしても機能している。巻き込んでしまったという戸惑いから表出した消極的な発言とは異なり、当事者ではないにもかかわらず行動するアライの姿を、当事者が活動の中でまなざすことにより、当事者自身が再び活動に注力するための積極的な動機（「わいが動かんのはダメやろ」）を得ることにつながっている。このことから、非当事者メンバーが個々人として行動しながらチームの活動を継続させていたことは、「当事者である」からこそ活動する、活動しなければならない、というアイデンティフィケーションをもたらしたといえる。

しかし同時に、活動メンバーはこの「当事者／非当事者」枠組みの限界や危うさを認識していく。その限界とは第一に、「当事者」を画一的な概念として想定するのでは汲み取ることのできない各人の生があるということである。5.1.の後藤 FGIのように、当事者のライフストーリーを目の前で聴くことで感じられた「リアリティ」は、当事者学生にとっても自身の当事者性を揺さぶる契機であった（「自分の持つる当事者性はすごく狭いのかな。狭いというか、そんな他の人の当事者の人にこう敷衍というか、当てはめて考えることができないものも多いんだなっていう風に気付いて。」（木原 FGI））。さらに当事者という言葉が表象する、困難を抱えた個人という一面的な認識が、当事者自身の生を歪曲してしまうことへの戸惑いについても語られていた（正木は「当事者が普通に、普通にというか、実際に生活をこう送っていることを、こう、自分も普段送ってる」（正木 FGI）としていた）。

第二に、「当事者」という言葉の使い勝手のよさから、「当事者」というアイデンティティを他者に押し付けてしまうという危うさである。澤田はライフストーリーの共有を「当事者」として依頼した学生から「自身を当事者だと捉えることに違和感がある」（澤田 AE）と告げられたことを受け、「（自分と）同じ当事者である」という捉え方が自らを安心させるためのものだったことを、自戒を込めながら記述している。

「当事者」という言葉は、かれらと私自身を「われわれ」という同じ位置に据え置いてくれる。同質＝味方であるという安心感を得るために、安易にかれらに「当事者」というアイデンティティを押し付けようとした、そんな自分の浅はかさを何度も悔やんだ。このことによって私は、これまで信じてきた「当事者」という枠組みの脆さや不安定さに直面せざるをえなかった。（澤田 AE）

第三に、「当事者／非当事者」という枠組みがもたらす分断機能の危うさである。非当事者メンバーの中には、活動の中で自らの加害性、特権性、当事者との「差異」をより強く認識し、「LGBTQ+コミュニティの味方」として、自分がどのように振るまえばよいのかという点を見失っていく者もいた。「当事者」というアイデンティティは、行動を起こすことの根拠や正当性を要求しないのに対して、「非当事者」というアイデンティティはそれらを常に求めるのではないだろうか。

ミク(後藤)は、LGBTQ+コミュニティの味方でありたいと願いながらも、「当事者」との関わりのなかで、自身の加害性や特権に苦しみ、アライとして行動し続けることができなかったことを議論の中で涙ながらに語ってくれた。よほど勇気がいったことだろう。(澤田 AE)

「差異」がわたしとあなた、仲間たちとで無限に立ち上がってくる、ささやいてくる、「差異」に呼びかけられるなかで、わたし自身がどうすればいいのか・どうしたら共に歩んでいけるのかが見えづらくなっていた。(藤島 AE)

後藤は、「自身の加害性や特権」といった当事者との懸隔に苦しみ、かれらに歩み寄ろうと「アライ」というアイデンティティより強く意識するがゆえに、行動し続けることのできない自分に涙を流した。藤島は、当事者との「差異」を意識させられる中で、自身の行動指針を見失っている。

相浦は、このような非当事者の苦しみについて省察している。相浦は、青年期に社会と自己のジェンダー観に乖離を感じて以来、自己の模索を強いられてきた。しかし、本活動に参加する時点では既に A ジェンダーとしての自己意識を獲得しており、相浦はこれが今回の活動の中で自己の模索に伴う困難(「自己の分析は...困難かつ精神的な労力を要する作業で、断続的に何年も要した」(相浦 AE))を感じずにすんだ理由と考えている。一方で相浦は、これまで自己の模索を強いられてこなかった非当事者性を帯びたメンバーたちが、活動を通し自己を内省する中で「センシティブで傷つきやすくなっていく」(相浦 AE) さまを見ている。

アライが「行動する人」という意味を内包する以上、「アライであること」は行動を要求する。「非当事者だ」と思っている人は(実際「当事者」でないのか、という議論は置いておいて)、アライたる自分を確立してから行動を始めるということではできない(「当事者」と思っている人は、自分であるだけで「非当事者」とは異なる位置に自分を固定できる)。自己の模索と行動を同時に行う必要があり、そう考えると、「当事者だ」と感じる人よりも「非当事者だ」と思っている人の方が、苦しみやすいのかもしれない。そう、アライとは何かを議論した回のあとに考えた。(相浦 AE)

ここで相浦は、非当事者性を帯びたメンバーが、活動の根拠となる「アライ」たる自身のアイデンティティを模索しながら、併行して行動を起こしていかなければならないという困難を指摘している。トラウマについて語ることやその支援のありようについて明らかにした宮地尚子によれば、「当事者とはちがって『逃げる』という選択肢がある分、支援者や研究者が関わりつづけること、つまり支援者や研究者としてサバイブしつづけることはより難しいとも言うる」(宮地 2018:8)という。たしかにここでは、「非当事者」かつ「アライ」であろうとするメンバーが、自身の逃げてしまいたさや、逃げられるという立場性のなかで「苦しみ」を感じる一面があったことがうかがえる。しかしここで重要なのは、自己の模索を終え行動することに焦点を当てていた相浦が、過去の自分自身と重ね合わせながら非当事者のメンバーのありようをまなざしていたことであり、



「当事者／非当事者」という二分法的な対立軸が、共に活動することを通じて、当事者・非当事者の双方から問い直されていったということである。すなわち、非当事者が表明した「苦しみ」は、非当事者であるがゆえに抱かざるを得ない自省的かつ自罰的な「苦しみ」ではなく、当事者性を帯びた相浦や他の当事者らが自らの経験を読み込むことで共に解釈しうる「苦しみ」となったのである。ここには「当事者／非当事者」という差異がありながらも、その枠組みが想定していた二分法を攪乱する契機があるといえるのではないか。

### 6.3. 差異の連帯を可能にする新たな共通基盤としてのアフィニティ

前節で言及した「当事者／非当事者」枠組みの再考は、自らが非当事者となる文脈において、具体的な行動を起こすアライたり得ているのかという葛藤につながっていく。

私は、私が非当事者であると認識している場面で、「アライ」たりえているのだろうか。自分の当事者性に基づいて立ち上げたこの団体のみに、時間と労力を割く私こそ偽善者ではないか。(澤田 AE)

今までは、その、ライフストーリーとか聴く側だけでなんか何もできなくて、逆にずっと申し訳ない気持ちをずっと持っていて、(後藤 FGI)

当事者学生のライフストーリーを聴くなかで生まれた上記の葛藤は、5.3.で述べた通り、具体的にアクションを起こす過程を通じて、活動自体やその活動に参加できている自分自身に対する自信や誇りへと昇華されていった。ここから窺えるのは、自らを活動者と意味付け、他者の公正な権利獲得のための活動へと自らを奮い立たせると共に、充実感と自信を獲得していく活動メンバーの姿である。そして、「当事者／非当事者」の垣根を越え、活動者としての自信と自覚を深めていったメンバーは、本活動に固有の「共通の立場性」を形成していく。その際に戦略的に用いられたのは、次に見るように、「アライ」ではなく「仲間」という言葉であった。

全員で『アライ』を目指す。理想のアライとして行動することに、誰もが失敗することがあるだろう。その度に、今の自分と『アライ』の間に距離を感じることもあるかもしれない。それでも、この活動の仲間であることは変わらない。ちょうど、「当事者だ」という意識が担ってきたような仕事を、「仲間」という言葉が担えるはずだ。(相浦 AE)

ここで相浦が提起するのは、到達困難なアライという像を理想として掲げ、失敗しながらもそれを共に目指す私たちを「仲間」と呼び連帯することである。そして、次に見るように「仲間」は、個々に差異があり、それを互いに尊重しながらも、共通の理念を持ち同じ方向を向いている集団と認識されている。そこにおいて個々の差異は忌避されるより、むしろ連帯する意義につながるものとして肯定的に捉えられる。また、「仲間」という共通の立場性は、各活動メンバーをエンパワーする媒体として認識されている点にも注目したい。

みんな当たり前だけどそれぞれ違っていて、考えていることも、今までやってきたことも。で、だからこそ、みんなで集まってやる意義があるんだらうなってところで、自分は仲間、一緒にやりたい人たちっていう風にアイデンティファイされていったような気がします。(萩原 FGI)

みんな真剣に考えていて、それぞれ違う人だけれども、こう、同じ問題の方を向いているっていう信頼感みたいなものが、こう、芽生えたので、その後の、後半の運動のパートに繋がったのは、すごく、そこかなっていう風なことを思いました。(相浦 (FGI))

私たちにはこういった仲間、大切な仲間がいる、私をこう助けてくれるというか、私を愛してくれている人たちがここにはいるっていうことを思うと、強くなれるというか、プライドを持てるなっていうのはすごく思う。(後藤 FGI)

本活動においてみられたこのような連帯のあり方は、Haraway (1991) や Ahmed (2016) が呼ぶところのアフィニティに関連づけて理解することができる。アフィニティとは、「血縁ではなく、選択にもとづくような関係」(Haraway, 1991: 297) であり、アイデンティティ(「である」という属性)ではなく、選択的なつながり・実践を通して連帯していくあり方を指す。Ahmed (2016) はアフィニティの方法として、「ハンマーの共鳴性 (affinity of hammers)」を提言し、この議論の前提として特権概念に言及している。Ahmed によれば、特権とは、誰が何を試みるかに応じて目前に現れたり、現れなかったりする、壁(walls)のようなものである。そして、これらの壁の維持に私たちが加担していることに気づかないまま、これらの壁によって特定の他者の存在はハンマーに打たれるようにして削り取られている。それと同時に、その他者の中には、ハンマーを振るってその壁を削り取ろうとする者がいる。私たちは、これらのハンマーが振るわれているからこそ、そこに壁があることを認識できる。そうであるならば、私たちはかれらと共に、その壁を削り取ること、すなわち、「物理的、社会的な障壁を削り取る」こと―「存在しようと試みたり、存在を変換しようと試みたりすること」―で、ハンマーを共鳴させることができる (Ahmed, 2016: 32)。つまり、連帯は、互いに異なる抑圧・抵抗の経験を有する者たちが互いの差異を認め、しかし同時に互いの間に類縁性を見出し、互いを取り巻く抑圧の構造に協働的に対抗する方法を獲得することから始まるということである。活動メンバーは活動を通して、自身らの間に「異なりながらも類縁している」という、新たな境界線の引き方を見出すようになっていった。

リサさんと B さんのライフストーリーの回、このお2人の回だけだと思んですけど、...2人がそれをせざるを得なかったわけじゃないだらうなっていうふうな時に、自分と重ね合わせて、辛いな、しんどいなっていう風な、こう感情にこうなってるなっていう風な印象が結構あります (正木 FGI)

男友達との会話では話を合わせるっていう話で、自分は性自認男性なんですけど、シスヘテロ男性なんですけど、ジェンダーとかセクシュアリティに関する知識とか興味関心が高まっていく深まっていくのが遅かったので、中高はもうほとんど興味

なくて、そういう話にも全然ついていけないというところで、なんかこう、居心地の悪さを感じていたという。全然要因はAさんとは違うんですけど、そこでちょっと共感がありました。 (萩原 FGI)

正木は、「それをせざるを得なかったわけじゃない」(状況が異なれば経験せずに済んだであろう) つらい体験をしたという点にまで個人の体験を普遍化することにより、他の活動メンバーとの類縁性を見出している。萩原は、周囲の男性コミュニティでの異性愛主義的会話に同調しなければならなかったという同性愛者の男子学生の体験を聞き、要因こそ異なるものの結果的にセクシャルな話題に自らを合わせなければならなかったという点に自身の体験を重ね合わせている。

活動メンバーは、自身や他者が経験した困難の要因が様々に異なることを認識しつつも、アフィニティを獲得していく。ここで重要なことは、このアフィニティが「人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、ネイション、アビリティ/ディサビリティ、エスニシティ、年齢などさまざまな要素の交差する権力関係と社会的立場の複雑性を捉える概念」(Collins, & Bilge, 2020=2021: 343-344) であるインターセクショナルリティを前提としていることである。これにより、アフィニティという連帯のあり方は、本稿が特に紙幅を割いてきた LGBTQ+当事者と非当事者の連帯に加えて、LGBTQ+当事者同士や、これまでの活動で扱いきれなかった文脈における連帯にも有用なものになり得ていく。実際、5.2.で当事者内部の特権性として言及した木原の「性別とかジェンダーについて、自分があんまり考えてなかったんだな」という言葉は、「当事者」という概念で自らと他者を画一的に結びつけることの危うさを自覚したものとも捉えられる。この自覚は、同じ LGBTQ+当事者であっても、その他の多様な要素・属性の交錯を前提とすることにより、互いの差異を尊重した形での連帯を可能にする。さらに、本来一つの括りには帰納できないはずの LGBTQ+という概念を、一個人にまで具体化し活動のターゲットや目的をより現実的なものにしていくことにも資する。また、以下の澤田の言葉は、セクシュアリティという文脈ではマイノリティであっても、ジェンダー(シスジェンダー男性であるという点)においてはマジョリティである自身のアイデンティティを自覚するものであり、今後本活動の対象を拡大していくうえで重要な認識である。

...自分の反省として、僕が、マジョリティ性があるジェンダーっていう点で、マジョリティ性があるものを生きてきたから拾いきれていないなという(ことを)ひしひし感じていて。やっぱ密接に関わってるし。 (澤田 FGI)

自分が活動を共にしようとしている他者との差異を認めることは、時に自らの行動指針を見失わせたり、活動へのコミット低下を引き起こしたりする(6.1.、6.2.)。しかし、差異を認めるということは決して消極的な行為ではない。実際、それは自身と他者との間に存在する非対称的な権力関係に誠実に向き合う姿勢や(6.1.)、類縁性を見つけ出す過程において各自の経験やアイデンティティの差異を尊重する態度として表われた(6.3.)。そして最終的に、個々の違いに辟易するのではなく、それを認めつつ、他の活動メンバーとの類縁性を見出しながら、「仲間」として連帯することを選択した活動メンバーは、共に活動に従事し続けること、別言すれば、共通の壁にハンマーを振るい続け

ることができた。その際、「仲間」という共通の立場性が、メンバー間相互の適度な緊張感と活動参加のためのエンパワーメントを共在可能なものにしていった。

特筆すべきは、本活動における上記のような連帯のあり方が、Freire 以来の批判的教育学が前提としてきた二項対立的枠組みを超え出るものであるということだ。Freire (1970=2011) が提唱した真の人間解放を目指す教育は、被抑圧者自らが主体となり、抑圧状況が生み出される原因を批判的に認識し、他者と対話を重ねながら現実世界を自ら名付け変革していくことで、抑圧者と被抑圧者の人間性回復を図るものであった。また、社会的不正義を是正するために、マジョリティが自身の持つ特権を自覚することで、マジョリティとマイノリティ、つまりは被抑圧者と抑圧者が協働的に社会変革に向かう必要があることも示されてきた (Goodman, 2011=2017)。これに対して本活動は、たしかにセクシュアリティの文脈における被抑圧者・マイノリティである澤田の呼び掛けに応じて始められたものであるが、活動のなかで当事者／非当事者という枠組み自体を脱構築し、「仲間」というアフィニティのもとでメンバーが連帯して社会的不正義の是正に向かうものであった。このことは、従来の批判的教育学が前提としていた被抑圧者／抑圧者、マイノリティ／マジョリティという枠組みを超えて、「仲間」という関係論的な活動主体による変革的实践に本活動が歩みを進めたことを意味する。

以上、本章では当事者学生および非当事者学生がいかにして共に活動し続けられた／続けられなかったのかという研究課題について論じた。具体的には、情動がコミット向上／低下の双方において重要な要因であったこと、「当事者／非当事者」という二項対立的な枠組みが活動のなかで相対化され、それを前提に「仲間」という語を媒介としたアフィニティとしての連帯が実現していたことを考察した。

## 7. おわりに

本研究では、LGBTQ+当事者学生と非当事者学生が共に学び合う学生サークルの事例に焦点を置き、そこでの活動を通して活動メンバーらが何を学び、いかに変化してきたか、いかにして活動を続けてきたのかを分析した。活動を通して活動メンバーらは、他者の具体的でありありとした生に触れ、自らの行動や意識を顧みながら、自省心・知識・自信に基づいた行動に乗り出すように変容を遂げていった。このような学びが得られた背景には、情動に裏付けられた問題意識や他者との真摯な対峙姿勢、そこから導かれた当事者／非当事者という二項対立的枠組みの再考と協働のための新たな枠組みの生成があり、これらによって各メンバーの継続的参加が成し遂げられてきたと考えられる。

冒頭で述べたように、日本では近年、LGBTQ+の包摂を求める声の高まりに呼応するかたちでバックラッシュを煽る政治的・差別的言説が加熱してきた。社会は右と左に分断し、LGBTQ+の人権は政治的争点とみなされながら、境界の左右に立つものの中で、得るか奪うかの闘技に落とし込まれている。他方、社会はますます個人化し、社会的マイノリティ／マジョリティというそれ自体あまりにも短絡的な二項図式の狭間には、いまだ無関心という強大な暴力が維持され続けている。本研究は、このような文脈にある日本社会のなかで、LGBTQ+当事者／非当事者という二項対立的図式の両極に位置付けられた者たちが、その二分法の克服を図りながら、異なりを認めつつも協働し続けようとしてきた営為と、そこでの学びに焦点を当てた。それは、分断が分断を生むこの社会のなかで、それでも共にあり続けようと各人が協働する、ある種のユートピア的空間への着目である。ただし、ここでのユートピアとは観念論／唯物論という二項対立の前者

に結びつけられた、現実に存在しない場のことではない。むしろそれは、私たちが住まうこの社会の現実を複数のリアリティーズの競合の結果とみて、他でもありえた現実を構想するために批判的人類学が航路を開いてきた、多自然主義的な存在論に基づくユートピアである (Hage, 2015)。教育という営為が、学習者の自己変容を促すことを求める以上、「私たち」を「他でもありえた私たち」へと変容するための教育実践に取り組むことで、ユートピアとみなされてきた現実を、既存の社会に代わるオルタナティブとして提示していくことが教育学の務めであろう。この意味において、本研究で着目した学生サークルは、活動メンバーそれぞれに、LGBTQ+を取り巻く問題や他者に対するオルタナティブな関わり方、「私たち」と「かれら」の間に、オルタナティブな境界線の引き方を提示した、批判的教育実践であったと振り返ることができる。

本研究に残された課題は、サークル所属メンバーのうち、本研究プロジェクトには参加しなかった 12 名の経験を研究対象に含むことができなかつたというものである。なかには、活動へのコミットメントを次第に減じていった者や、研究プロジェクトへの参与に関心を示さなかつた者もいた。この 12 名が、いかにして本活動に関わり続けられた／続けられなかつたのかという問いに対して本研究の知見は十分な答えを返すことができない。研究倫理の観点から大きな制約はあるが、今後かれらから聞き取りを行うことができれば、今回得られた知見をさらに深めることができるだろう。

---

<sup>1</sup> 一橋大学法科大学院において、自らのセクシュアリティを友人によって断りなく周知された (アウティング) ことをきっかけに、男性同性愛者の学生が同大学敷地内にて頭身自殺をおこなった事件のこと。

<sup>2</sup> カミングアウトとは、個人的な告白のみならず、社会を変えるための政治的行動でもあるとする立場がある。風間 (2002) は、カミングアウトを、既存社会の権力枠組みを疑問視し、これに抵抗する行為として位置付けている。

## 参考文献

- Adams, T. E., Ellis, C., & Jones, S. H. (2017). Autoethnography. *The International Encyclopedia of Communication Research Methods*. Hoboken, John Wiley & Sons.
- Ahmed, S. (2016). An Affinity of Hammers. *Transgender Studies Quarterly*, 3(1-2), 22-34.
- Brown, T. M., & Rodriguez, L. F. (2009). *Youth in Participatory Action Research: New Directions for Youth Development*. Jossey-Bass.
- Chang, H., Ngunjiri, F., & Hernandez, K.A.C. (2013). *Collaborative Autoethnography* (1st ed.). Routledge.
- Collins, P. H., & Bilge, S. (2020). *Intersectionality* (2nd ed.). Polity Press. (小原理乃 (訳) 下地ローレンス吉孝 (監訳) (2021) 『インターセクショナルリティ』人文書院.)
- 出口真紀子 (2021) 「第4章 特権の概念」坂本光代 (編) 『多文化を再考する マジョリティに向けた多文化教育』上智大学出版.
- Goodman, D. J. (2011). Promoting Diversity and Social Justice: Educating People from Privileged Groups. Routledge. (出口真紀子 (監訳) (2017) 『真のダイバーシティをめざして—特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』上智大学出版.)
- Freire, P. (1970). *Pedagogy of the Oppressed*. Seabury Press. (三砂ちずる (訳) (2011) 『被抑圧者の教育学新訳』亜紀書房.)
- Goldstein, S. B. (2017). Stigma and stigma by association in perceptions of straight allies, *Journal of LGBT Youth*, 14, 345-358.
- Goldstein, S. N., & Davis, D. S. (2010). Heterosexual Allies: A Descriptive Profile. *Equity & Excellence in Education*, 43(4), 478-494.
- GSA Network HP “What is a GSA club?” <https://gsanetwork.org/what-is-a-gsa/> (2024年5月31日最終閲覧)
- Gould, D. B. (2009). *Moving Politics: Emotion and ACT UP's Fight against AIDS*. The University of Chicago Press.
- Hage, G. (2015). *Alter-politics: Critical anthropology and the radical imagination*. Melbourne University Publishing. (塩原良和・川端浩平 (監訳) (2022) 『オルター・ポリティクス—批判的人類学とラディカルな想像力』明石書店.)
- Haraway, D. J. (1991). A Cyborg Manifesto: Science, technology, and Socialist-Feminism in the Late Twentieth Century. *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. Routledge.
- 河嶋静代 (2020) 「大学の SOGI の多様性に関する取り組みの現状と課題—大学における新しい価値を創造する社会的包摂の実践—」『北九州市立大学文学部紀要 (人間関係学科)』27, 53-69.
- 風間孝 (2002) 「カミングアウトのポリティクス」『社会学評論』53(3), 348-364.
- 小林良介・金智慧・佐藤遊馬 (2017) 「東京大学において LGBT 当事者が抱える困難とニューズフォーカスグループインタビューを用いた質的研究」『東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要』4, 46-59.
- Lapointe, A. A. (2015). Standing “Straight” Up to Homophobia: Straight Allies’ Involvement in GSAs. *Journal of LGBT Youth*, 12, 144-169.
- Levesque, A. (2019). “I’ve Always Wanted a Gay Family Member!”: Straight Ally Girls and Gender Inequality in a High School Gay-Straight Alliance. *Qualitative Sociology*, 42(2), 205-225.

- Loutzenheiser, L. W., & Moore, S. D. M. (2009). Safe schools, sexuality and critical education. In M. Apple, W. Au & L. A. Gandin (Eds.), *The Routledge international handbook of critical education*. Routledge.
- Mayo Jr, J. B. (2013). Critical pedagogy enacted in the gay–straight alliance: New possibilities for a third space in teacher development. *Educational Researcher*, 42(5), 266-275.
- 宮地尚子 (2018) 『新装版 環状島—トラウマの地政学』みすず書房.
- 文部科学省 (2000) 『大学における学生生活の充実方策について (報告) —学生の立場に立った大学づくりを目指して—』
- 文部科学省 (2017) 『「いじめの防止等のための基本的な方針」の改訂及び「いじめの重大事態の調査に関するガイドライン」の策定について (通知)』
- 文部科学省 (2022) 『生徒指導提要』
- 室田信一 (2024) 「第1章 コミュニティ・オーガナイズング研究の現在地」室田信一・石神圭子・竹端寛 (編) 『コミュニティ・オーガナイズングの理論と実践—領域横断的に読み解く』有斐閣.
- 日本学生支援機構 (2023) 「令和5年度 学生生活にかかる喫緊の課題に関するセミナー (オンライン開催)」[https://www.jasso.go.jp/gakusei/about/seminar\\_kikkinkadai/2023.html](https://www.jasso.go.jp/gakusei/about/seminar_kikkinkadai/2023.html) (最終閲覧日 2024年5月31日)
- 野澤俊介・難波阿丹・難波純也・仁井田千絵・近藤和都 (2017) 「情動の出来事性—インターフェイス・ライブ性・交感—」『東京大学大学院情報学環情報学研究調査研究編』33, 1-30.
- 織田佳晃・澤田有希子・吉川寛・飯塚諒・梶谷優希・高林要・武田丈 (2022) 「関西学院大学における性的マイノリティ当事者の困難とニーズ—LGBTQ 当事者サークル CASSIS を対象としたフォーカスグループインタビューから」『関西学院大学人権研究』26, 1-10.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析—原理・方法・実践』新曜社.
- Scheer, J. R., & Poteat, V. P. (2016). Factors associated with straight allies' current engagement levels within Gay–Straight Alliances. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 43, 112–119.
- Toyosaki, S., Pensoneau-Conway, S. L., Wendt, N. A., & Leathers, K. (2009). Community Autoethnography: Compiling the Personal and Resituating Whiteness. *Cultural Studies ↔ Critical Methodologies*, 9(1), 56-83.

付録 コミュニティ・オートエスノグラフィー全文

澤田：怒りと絶望に導かれて

2023年2月3日、同性愛者が「隣に住んでいるのもちょっと嫌だ」、「見るのも嫌だ」という差別発言が、当時の首相秘書官によってなされた。勇敢な記者、新聞社が、オフレコ取材の定石を破ってこの事実を記事にしたその夜、大学院生の私は、高校時代の暗い記憶を再訪することとなった。

私は、同性愛者である。中学生の頃から自覚していたこの性的指向は、高校時代の私にとって、希望を失うのに十分な条件であった。キャリア教育や進学指導、ともすれば日常の些細な場面で、教師や生徒が笑顔で語る結婚願望 (または結婚をしないという自己選択の主張) や、家族を持つという夢。それらはこの国に生まれた同性愛者の私にとって、どれも抱くことさえ許されない幻想だった。皆にとっての将来の希望は、私にとっての絶望の種だった。未来が閉ざされた感覚のなか、学校を休みがちになった私は、その理由もわからず心配の声をかけつづけ、一方で私の絶望に加担しつづける家族や友人たちに対して、心を閉ざすようになっていった。命を断ってしまいたいと何度思い詰めたことだろう。上京後の煌びやかな学部生活で完璧に塗り替えられたはずだった死の匂いのする高校時代に、永田町の差別発言が私を再度誘ったのである。

あの夜、私は、私や私の人生、大切な人びとの命を、「国」によってズタズタに引き裂かれた気持ちに苛まれていた。だが当時、このことを相談できる友人が私には居なかった。いや、正確には仲の良い友人は大学院にも複数

いた。けれど、異性愛者・シスジェンダーのかれら（多くは高校時代の周囲の生徒と同様の夢を持っているだろう）が、私の絶望を、孤独を、悲痛を、怒りを、諦めを、苦しみを、どこまで理解してくれるのだろうか。怒りに任せて話をすれば、政治の話ばかりする面倒なLGBT活動家だと疎ましがられてしまうのではないか。そう考えた私は、すぐさま周囲の友人たちを頼ると言うことができなかった。

そんな悩みをFacebookに吐いた際、これまでの人生でお世話になったLGBTQ+の教員ら（学部時代の恩師たち）、アライの教員や企業人から、溢れんばかりの励ましの言葉をいただいた。「打ちひしがれているだけではダメだ」。共に怒ったり悲しんだりすることができる、LGBTQ+が今より生きやすい社会を作るために共に行動することができる、そんなコミュニティを創ろうと思った。頼ることを一度は避けてしまった周囲の友人たちを中心に声を掛けた末、当事者・非当事者ごちゃまぜの10人ばかりの大学（院）生が図書館のセミナールームに集まった。本活動の誕生である。

### 萩原：優しく、かつ非情な私

私がこの活動に参加したきっかけは、特に仲良くしていた友人である澤田に誘われたからである。澤田は、当時の首相秘書官による差別発言に対する怒りと共に、当事者・非当事者に関係なく、単に勉強するだけではなく具体的なアクションを実行するコミュニティを作りたいと語ってくれたと記憶している。正直なところ、当時の私は差別発言について情報としては知っていたものの、日々溢れる情報を摂取することに夢中で、幸いかつ非情にもその出来事を忘れていた。恐らく、当時の私にとっては、その他の情報と同じくこの件も「社会問題」の一つとしか受け止められていなかったのであろう。それが、大切な友人である澤田の、重く、強く、そのすべてを表わすにはあまりにも短い言葉によって、「私の大切な人を今まさに苦しめている問題」へと変わった。

しかし、このように記述する現在の私も、活動に対して感情がどれだけ動いているかという点について常に葛藤を抱えている。当事者の方のライフストーリーでは、決して一般化できない、その人なりの不安・葛藤・喜びを聞かせていただいた。ただ、その場では自分なりに最大の共感を示し、それらを構造的問題に還元し受け止めつつも、話を聞いたその日でさえよく眠れてしまっている自分がある。活動中、全体会の参加率が低くなったり、キャンパス内での広報活動への参加率がなかなか上がらなかつたりしたことがあった。私はそのほとんど全てに参加しつつ、私と同じように、いやそれ以上に、他の皆はこの活動に共感し参加しているのではなかったのかと、少しの怒りと疑問と孤独感を抱いた。しかし、同時に自分の方こそ感情的に動かされていないからこそ、勤勉かつ非情にも活動に参加し続けられているのではないかと思った。予定帳に「T-ACT ○○:○○」と書き込む度に、活動が日々の単純なタスクと化してしまっているのではないかと不安になるのである。ただ少なくとも、自らの教養を肥やすだけで何もしていなかったあの時の自分よりは、日常的に特に意識せず行動している現在の自分を、私自身好意的に受け入れられそうだ。

### 相浦：性別という皮

大学合格が決まってから入学式までの間、私は服探しに奔走していた。

小学校最後の日、つまり中学校の制服を着て臨む卒業式の日、友人たちと制服でスカートが強制されることへの文句を言い合って盛り上がったものだった。しかし、制服が日常になると徐々に何も感じなくなった。着る服を選ぶ必要のない簡単に感謝さえした——制服が男女で違う型であることには、ずっと不満を持っていたが。そうして6年間を制服で過ごしたあと、私には毎日大学に着ていけるようなまとまな私服がなかった。服への興味が希薄な私は、結果としていくつかの大量生産型の服をクローゼットに加えることとなり、私の親に言わせると「よく見かける若い男性」風のコーディネートが誕生した。

大学で講義を受けるなかで知ったのだが、私の服装・髪型・声・身長などの組み合わせは、「女性/男性」の世界で生きている人に混乱を引き起こす場合があるらしい。男女どちらであるのかを、授業中に教員から質問されることが何度かあった。困惑と不快感と落胆をなまぜにした気持ちがあった。私はAFAB (Assigned Female at Birth) だが、自分の中にジェンダーという感覚がないノンバイナリー（詳細にいうならAジェンダーに近い）である。

素晴らしいことに、私が大学に入学したときには、学生名簿から性別表記は消えていた。皮肉なことに、それゆえ「答え合わせ」ができない授業担当教員は私に不快な質問をした。それまで学校で性別を尋ねられることがなかったのは、男女差のある制服が「性別」の判定を一手に引き受けていたからだろう。「性別付き」の服を疎ましくは思っていたが、脱いでみるまで、それが防護服たり得るほど重いものだとは気付かなかった。

なぜ大学で真面目に授業を受けているだけで不快な経験をしなければならぬのか。教員が少し気を付けてその一言を言わなければ、それだけで良かったのに。言わない方が良く知っていれば、教員も言わなかっただろう。教員に「言わない方が良く」と知ってもらうために、何かアクションがしたい。そんなことを考えていたが、それは夢物語であって実現できそうにはなかった。夢を行動に移すのは苦手である。

中学校に入学したとき、誰でもズボン・スカートを選擇できるように学校の制服制度を変えるのだと私は息まいていた。意見箱に投書してみたり、生徒会役員になってみたりした。その意見箱は稼働していなかったのだと、投書の1年後に役員として意見箱を開けたときに知った。私は多くの生徒を巻き込んで制服改革をするほどのノウハウもエネルギーも持ち合わせていなかったため、結局何もしないまま卒業した。夢を漠然と語ることだけは一人前だった私は、「例え選ぶ人が少なくても、女子もズボン、男子もスカートを選擇するようにすべきだ（今の私なら、男子/女子という語は使わないだろう）」と、教師と雑談しているときに訴えた。「男子がスカート？」と、教師は笑いながら返した。

しばらくして、私は自分の内側を研究することに注力するようになった。自己の分析は興味深い困難かつ精神的な労力を要する作業で、断続的に何年も要した。その間、私はずっと観察者であり、アクションを起こそうと思



えるほど安定していなかった。納得のいく結論が出たのがちょうど大学1年次の半ばだったので、何か行動したいと思い始めたのもそのころからだ。翌年、本活動の存在を知ったとき、すぐさま飛びついた。自分がゼロから活動を起こすのは難しいと経験的に分かっていたので、何かしたいと考えていた私には渡りに船だった。制服を変えるとかつて意気込んでから、実に7年以上が経過していた。

#### 後藤：自分が嫌い、怖い

LGBTQ+に関しては、正直すごく無知だった。この活動を通して、それを突きつけられた。自分は、どんな人にも、「寛容」でありたいと思っていたし、絶対に差別などせず、性別や国籍などではなく「人」として、今まで出会ってきた人とは、関わってきたはずだった。一方で、あきら（澤田）と出会い、あきらへの辛かった過去を聞き、今まで自分は知らないところで誰かを傷つけていたのかもしれないと思って「しんどくなった」。これは、活動に参加する前。あきらと出会って、少し経ってからのことだ。「ああ、自分って、なんも分かってないやん」って憤りを感じたことを覚えている。その後、私は留学に行った。留学時、本当に辛い経験をして帰ってきたとき、あきらとゆうと（萩原）と、「みんなの「居場所」をつくりたいね」という話で盛り上がったことを覚えている。それが、このT-ACTのはじまりのはじまりだったのかな。

あきらが、本気でこの団体を立ち上げたとき、自分自身、精神的に不安定な時期だった。毎日自分と闘うことで精一杯で、この活動に参加できるか「自信」がとてなかつた。しかし、大事な友達のあきらの思いをずっと近くで聞いていた友達だからこそ、一緒に何か活動したいと思いつた。それだけでない。あきらはいつも私のしんどい時に、一番に寄り添って共感し、やさしい言葉をかけてくれた。でも、私はあきらにそれほど寄り添うこともできず、助けになれることもできていない自分がやるせなかつた。自分も、誰かのためになりたい。いま、しんどい人がいるなら支えたいという気持ちもあったのかもしれない。今思うのは、自分は「LGBTQ+に寛容だ」という姿勢を見せてきたけど、それってただの自己満。なんにも、「寛容」ではないよな。そんな言葉、誰でも言えること。でもその言葉だけでは、助けたい人も、助けられない。ただ他人事しているだけ。一緒に闘うこと、一緒に声を上げることが大切だって思う。

正直、この活動に参加するのは「しんどい」ことが多かった。私は、言葉一つ一つ気にして話した。誰も傷つけない。その一心だった。そうすると、何も言えなくなってしまう。そして、疎外感まで感じてしまった。「私は、ここにいいのかな」「私って、結局何にもできてないな」と、自分のことが嫌いになった。私の大切な友達、あきらとゆうとが頑張っているから、私も頑張りたいと思って何とか、参加していた。けど、正直、もう、LINEのグループも抜けたって思うほど、「しんどい」時はあった。でも、逃げられるのってマジョリティの特権だよなって。「ああ、自分ってほんと無責任」とまた自分が嫌いになった。どうしたらいいんだろう。「つらい、しんどい、でも、誰にも言えない」そんな日が続いた。今は、みんなが大好きだけど、あの頃は、みんなが「敵」に見えた。私の発言で、怒らないかな、悲しまないかな、攻撃されないかな、「怖かった」。そう、私はこの活動に参加することが徐々に「怖くなっていった」。

#### 木原：世界との接点

この世界では変なことがいっぱい起きてて、それにいちいち憤って、悪態ついて、変えなきゃって思う。でも全部に気持ちを配るのはキャパオーバーで、自分の中にはどうしても優先順位ができてしまう。LGBTQ+のことも、自分がたまたま「当事者」だったから知識が蓄えられていって、なんとなくフューチャーに出会ってビビってきて、いろんな人を見てクワイアってかっこいいってなって、今にいたる。LGBTQ+の問題も大事だし、他にも大事な問題、たくさんあるよね。例えばガザとか。あんなに大量に人が死んで、その様子がSNSで拡散されて、なんでまだ続いてんの？馬鹿なの？でも、こういう問題ってつながる。LGBTQ+もフェミニズムも帝国主義も原発も戦争も。だから全部だいたいなの。おかしいよって言い続けなきゃいけない。そういう気持ちでこの活動に関わってきた。

はじめはライフストーリーを話すことになって、あんまり当事者の意識がなかったから戸惑った。それはまだ続いている。昔を振り返ると、海外ドラマGleeを見て「gayの権利を認めろ！」って中学生の時に言いまくってた。影響されて友達もある程度フレンドリーになって、その時はまあまあハッピーだった。でも、今は無力感も感じちゃう。自分の活動が踏み絵みたいで、周りにいる理解のない人たちが浮き彫りになった。ジェンダーのこととか、自分事じゃないから関係ないですって顔された。ノンバイナリーなのにずっと「ちゃん」づけされた。敵意を向けてくる人に、根気強く優しく接しても意味ないのかも、って思った。でも諦めるのは癪だった。それにこの活動が居場所になってたし、共闘する存在は心強かった。信条はちがくても見てる方向はだいたい同じだから、細かいことは気にしないや、って楽しく過ごすことに決めた。

#### 澤田：行方不明な当事者と非当事者、そしてアライ

この活動の参加者には、個々人それぞれのアイデンティティの捉え方がある。私が当事者としてライフストーリーの共有を依頼した学生のなかには、自身を当事者だと捉えることに違和感があると教えてくれた者もいた。「当事者」という言葉は、かれらと私自身を「われわれ」という同じ位置に据え置いてくれる。同質＝味方であるという安心感を得るために、安易にかれらに「当事者」というアイデンティティを押し付けようとした、そんな自分の浅はかさを何度も悔やんだ。このことによって私は、これまで信じてきた「当事者」という枠組みの脆さや不安定さに直面せざるをえなかつた。

同じことは、「アライ」という枠組みに関しても起きた。一人の学生が彼自身のライフストーリーを話してくれた回、アライであり続けることの難しさが議論の俎上にあがった。「アライとは何か?」。早稲田大学 Gender and Sexuality Center は、アライを「1. LGBTQ+コミュニティが声を上げたときに一緒に行動する人、2. 自らの特権

を自覚し、その特権をLGBTQ+の公正のための運動にリソースとして活用する人」という二つの要素から定義する。つまり、自身の特権性を自覚し、LGBTQ+のために、LGBTQ+と共に行動する人たちが「アライ」ということになる。

ミク（後藤）は、LGBTQ+コミュニティの味方でありたいと願いながらも、「当事者」との関わりのなかで、自身の加害性や特権に苦しみ、アライとして行動し続けることができなかったことを議論の中で涙ながらに語ってくれた。よほど勇気がいったことだろう。宮地尚子は「当事者とはちがって『逃げる』という選択肢がある分、支援者や研究者が関わりつづけること、つまり支援者や研究者としてサバイブしつづけることはより難しいとも言う」とする。ミクや、活動への参加頻度が下がった他のメンバーを、「行動しない偽善者」「アライではない」として切り捨てるべきなのだろうか。吐き出す言葉を慎重に選びながら、どうしようもなく溢れ出る涙に濡れる友をみて、私はただ純粋にそう思えなくなっていった。

同時に、私自身は誰かの「アライ」でありつづけられているのか、という疑問が、私の頭を今この瞬間もずっとぐるぐるしている。リオデジャネイロでの選手の活躍を伝えるニュースによってかき消された、津久井やまゆり園での障害者殺人事件。そのことを受け、改めて表面化した優生思想と障害者差別の言説。ミネアポリスでのジョージ・フロイド氏の殺害、名古屋入管でのウィシユマ・サンダマリ氏の“殺害”の後、多くの者が怒りに震え批判に加わったにもかかわらず、あいも変わらず国内外に蔓延りつづける人種・民族・外国人差別。ロシアの攻撃停止を訴える渋谷駅前デモに参加したはずなのに、ニュースを追うことさえ止めてしまったウクライナ侵攻。頻繁に女性蔑視発言をする教員に何も言い返せないままの私。私は、私が非当事者であると認識している場面で、「アライ」たりえているのだろうか。自分の当事者性に基づいて立ち上げたこの団体のみに、時間と労力をさく私こそ偽善者ではないか。社会への怒りとともに、自分自身への怒りが込み上げる。

### 後藤：アライでありたい私との葛藤

私は、友達と恋バナをすることが大好きだ。大体、飲み会の場では友達と恋バナをする。自分自身、T-ACTの活動を始めてから、「恋人やパートナー」等、言葉を選んだり、人に恋愛の話を強要しないなど、いろいろ気にして話すことは多くなった。しかし、「忘れてしまう」時は正直あった。そこで、「はっと」する時が多かった。いわゆる男性に対しては、すぐに「彼女はいるの」とか、女性に対しては、「彼氏はいるの」とか、言うてしまうことは正直あった。そして、毎回家に帰って1人で反省会をしていた。そんな私が、本当に「アライ」を名乗って活動しているのか、すごく葛藤していた。葛藤を抱えつつも、自分や周りを変えたいとの一心で、活動を続けていた。

T-ACTで、「さあ、活動しよう」という話が上がった時、「身近な人へのアクション」が一番すぐに行動に移しやすい。まずは、身内から変えていきたいと言う話が挙がった。私もその意見に同意見だった。しかし、その時に、いつも一緒に飲んでた友達がふと頭の中に浮かんだ。友達の言動を正そうとするなかで、「私は、大事な友達に嫌われてしまうのかな。」と、すごく怖かった。でも、目の前の仲間の顔を見たら、そんなことを思ってしまった自分の自分がすごく恥づかしかった。気づけば、「自信がない」と、みんなの前で涙していた。みんなの顔が見れなかった。「ああ、もう今まで何を頑張ってきたんだろう」「ああ、何を言ってしまったんだろう」と思うなかで、やっぱり「怖い」「自分にはできない」と言ういろんな感情が混ざっていた。

実際、私は親に対してLGBTQ+について、「ちゃんと考えてほしい」と、同性婚の話やトランスジェンダーの人たちの話を一度したことがある。親も理解しようと寄り添ってくれたが、最終的には「他人事」としてしか考えてくれなかった上、「そんなの考えてたら、美句がしんどいから、あんまり考えない方がいいよ？」って言われた。その言葉に、あきれた。「ああ、もう話すだけエネルギーつかっちゃう」って思った。私が、身近な人へのアクションに対して、「自信のなさ」や抵抗感をもったのは、家族に対し行き場のない感情を抱いた経験も影響しているのかな。

その後、みんなにしばらく会えなくなった。

### 相瀬：「仲間」であること

「私」は一人でありながら「私たち」になり、強大に見えた「たくさんのあなたたち」は「あなた」になった。差別的な言動が多くの人を傷つけることは分かっている、それらを問題だと感じる意識とその感度は変わってはいないと思う。ただ、どうアプローチしていくのが良いのだろうとじっくり眺め、傍に立って思案することができるようになったのだ。一方で、活動の中で、センシティブで傷つきやすくなっていくメンバーがいるのを、私は見ていた。メンバーの怒り、悲しみ、やるせなさ、そういったエネルギーの発露に出会うたび、私は神妙な顔で興味深く話を聞いた。

「これに傷つく人がいるだろう」という理由でも、モヤモヤから逃れられなくなったなら、十分に当事者的だと思った。もともと、私は活動の中で当事者/非当事者という枠を気にしたことはほぼない。私にとってその二分は、グラデーションを途中で区切るような気持ち悪さがある。支援される/する側というエッセンスも感じてしまう。

「当事者/非当事者」と言われる人にも、色々な人がいる。色々な人の中で、LGBTQ+=ALLIES Salonに集まった人たちである、その認識で自分には十分だった。メンバーは仲間であり、全員で到達しうることのない理想の『アライ』を目指している。そうでなければ、全員で学んでいくというパートは必要なかっただろう。

アライが「行動する人」という意味を内包する以上、「アライであること」は行動を要求する。「非当事者だ」と思っている人は（実際「当事者」でないのか、という議論は置いておいて）、アライたる自分を確立してから行動を始めるということではできない（「当事者」と思っている人は、自分であるだけで「非当事者」とは異なる位置に自分を固定できる）。自己の模索と行動を同時に行う必要があり、そう考えると、「当事者だ」と感じる人よりも

「非当事者だ」と思っている人の方が、苦しみやすいのかもしれない。そう、アライとは何かを議論した回のあとに考えた。

全員で『アライ』を目指す。理想のアライとして行動することに、誰もが失敗することがあるだろう。その度に、今の自分と『アライ』の間に距離を感じることもあるかもしれない。それでも、この活動の仲間であることは変わらない。ちょうど、「当事者だ」という意識が担ってきたような仕事を、「仲間」という言葉が担えるはずだ。そして、少なくとも私の中では、「仲間」は十分に仕事を始めている。

#### 藤島：声と襲、あるいはわたしは何をきいているのか

「参加してみない？来る？」とT-ACTの活動に誘ってくれたときの、あなたのあの和やかな声をわたしが聞くまでに、どれほどの怒りや、悲しみを、痛みをあなたは感じていたのだろう。「来てほしい、協力してほしい、一緒に変えていきたい」と誘うあなたの声は、当時のわたしにはただ軽快な響きをもっていった。誰かと共にいることが好きなあなたが、いつものようにわたしを誘ってくれたのだらうと、その声を聞いた。そうとしか聞いていなかった。聞いていなかった。

その声がわたしに届くまでに、どんな壁があなたに迫っていたのだろう。少し先の未来が明るいものとして映ってこない。それが幻想だとは思わないし、思えない。ただ、どうしてわたしは、あなたの、あなたたちの、そしてわたしたちだと安易に理解していた者たちの、奪われているかもしれない未来があるということに気づかないでいられたのだらう、気づかなくてよかったのだらう。わたしのこれまでの言葉が、態度が、ふるまいが、そしてわたしが帰属していかれると思っている社会が、あなたのあり方や未来を奪っていたり押しさえつけていたりしているということを知らなくても・知ったとしても、自らは変わることなしで済ませられていた。

「差異」がわたしとあなた、仲間たちとで無限に立ち上がってくる、ささやいてくる、「差異」に呼びかけられるなかで、わたし自身がどうすればいいのか・どうしたら共に歩んでいけるのかが見えづらくなっていた。弱者性や犠牲者性のような「傷つき」の解釈枠組みを「当事者」や「マイノリティ」の声にたいして暗に明に当てはめてしまうとき、その人が他の誰でもなくその人であるということ、また日常で感じているさまざまなこびがその人を支えているということ、そしてわたし自身にも傷があり、かつその人が受けた傷を与えたものが私のそれと同じ顔をしているかもしれないということをおぼえずに済まされる。わたし、あなた、仲間たち、敵の「線引き」はアクションしやすくするための手段として活用できる一方で、わたしと誰かのあいだとで生じる曖昧な境界、ひだのような「差異」を引き裂いて、あいだなしの断絶を引き起こしてしまわないか。

傷つきをもつ誰かの声を聞くあなたが、仲間たちが、いま傷ついているかもしれないということを、わたしは容易に忘れることができってしまう。前半の活動では、ライフストーリーから構造的問題を発見し、この活動が向かうべき敵、訴えるべき相手はどこなのか、だれなのか、なんなのかを特定していった。性にかんする悩み、わかられないかもしれない悩み、そしてそれが自分だけの問題ではなく、自分のせいだと片付けてしまうことにためらっている学生、仲間たちのライフストーリーだ。誰かに聞かされたいと、聞き届けたいと、悩みを言葉に声にしようとする仲間たちを、共感をもって受け止め、悩みや問題を分かち合おうとする仲間たちの姿をまなざすにつけ、わたしはわたし自身の聞けていないさに、返す言葉の出なさに、かける言葉の浅はかさ、そしてまた言葉で傷つけてしまうかもしれないということに、どう向き合えばいいのか分からなかった。この分からなさは、分かっている・聞けているとわたしは思っている仲間たち自身の戸惑いを覆い隠し、安易にその凄さを尊敬してしまうことにもつながっていた。

だが、この活動で大事にしている、一緒に仲間たちと動くことがわたしにとっての戸惑いをほぐしてくれたように思う。さまざまな者たちがさまざまに異なりをもつなかで、共に現状を変えようと行動する、アクションする、知識だけではなくて共感と行動を重視するこの活動は、わたしにもなにかができると感じられるものだった。筑波大学のジェンダー・セクシュアリティの問題状況を調査するため、アンケートのピラ配りをしているとき、わたしは「おじさん」「男らしい男」に積極的にアプローチしてみた。安直なラベリングが危険なのは忘れてはならない。だが、「おじさん」は受け取ってくれそうな顔をしていないし、受け取る確率も低いように思ってしまった。が、それでもシスでヘテロな男としてのわたしが聞かなければ、わたしがこの問題について彼らに接してみなければ、離れきったままではないのだらうか。案外話してくれる人はいる。巻き込める人たちがいる。そのことをささやかな光としてまなざしてみたい。

#### 萩原：共に活動する私たちの多様性

あす（藤島）が、「筑波大学のジェンダー・セクシュアリティの問題状況を調査するため、アンケートのピラ配りをしているとき」、私も一緒にいた。あすは私に、いわゆる「男性」、特に3、4人の集団でいるケースだとチラシを受け取ってくれないという旨を話した。あすは、直前に「男性」を研究対象に卒業論文を執筆・提出していたので、特に「男性」にアプローチすることにこだわりを見せていたのだらう。そのことによほどの憤りを、悔しさ、変えなければならないという使命感を感じてか、一度、二度断られたり無視されたりした程度では決して引き下がらず、「男性」たちの後を追いつつも何度も話しかけていた。また、話を聞いてくれる人には、数分以上にわたってその人自身の体験や本活動の目的・経緯等を熱心に話し込んでいた。

それに対して、私は通行人の通行を妨げない程度に遠慮がちにチラシを提示し、「T-ACTでアンケートへの協力をお願いします。お時間のある際にご回答ください」という簡単な声掛けのみで、一度無視されたり断られたりした場合はすぐに渡すのを諦めていた。このスタイルは、私自身配布当初から貫いているもので、背景には人間は自分の事しか考えていないのが自然状態であり、さらに日本には街頭で渡される配布物はそれなりにやり過ご

すという文化が定着しているという認識がある。(実際、英語での説明を行った数十人はほとんどの場合受け取ってくれた。)

その折、私はチラシ配布のイニシアチブをとり、ほとんど毎日参加する一方で、なかなか上がらない参加率を嘆き、孤独感と若干のフラストレーションが溜まっていた。しかし、私とは対照的なあすの配布に対する姿勢を見ると、私はチラシ配布に対する心理的負荷が低い状態で行っているから、何度通行人に受け取ってもらえない、あるいは嫌悪感を示されるというストレスのかかる経験をしてでも継続的に活動を続けられていただけなのではないかと気付いた。あすは、チラシ配布を通して目の前のその人を変えようとしていたに対して、私はそうではなかった。

しかし、このことで私は自分を責めるのではなかった。私やあすにそうさせるのには各自に何らかの背景があるということで、それは自然なことだと考え、それを良い悪いという価値判断の対象とはしなかった。そのように多様な価値観・思想・行動特性を持っている人がいるからこそ活動が続いていくのではないかと思う。人それぞれ多様であってよいという感覚は、活動以前から有していたもので、上記の体験は私にとって認識の変化ではなくあくまで強化であった。

ただしこれを記述している現在、「人それぞれ多様であってよい」という思想が、LGBTQ+を取り巻く 이슈に無関心な人に対する肯定にも働いていそうな自分が少し怖い。少なくとも、あきらに出会う以前は無関心であった私は「LGBTQ+を取り巻く 이슈に無関心な人」に「共感」している。